2014年後半の見通し　金

秋口の安値を買い拾う作戦 量的緩和策終了見込んだ動き

GOLD 金

岡地（株）
東京支店
投資相談部
チーフアドバイザー
千葉 純平氏

金価格を予測するうえで注目したいのは、①為替、②欧米の株式市場、③金の需給バランス…で、これらを総合して見ていくべきだ。

為替は動きが鈍いが、RCI（株価が割安か割高かを判断するときに使われるテクニカル指標）を見ると円安の時間帯に入ったと思われ、東京金は上昇圧力がかかりやすい。

米株価は高値更新後に急落、波乱含みだ。95年以降のニューヨークダウの月足を見ると、〝年内調整必至〟の姿を示している。個人的には、ニューヨークダウが下落すると、金市場から投機資金が流出すると見ており、その動向から目を離せない。

需給を反映するニューヨーク金価格はレンジ相場で上値は重く、どちらかというと下げやすい環境にある。ただ、採算的に1、200ドル以下が抵抗ラインで、この辺りでは実需の買いが見込める。

東京金は材料不足から、チャートは下値を窺う展開で、これが4、000円なのか3、800円なのか読みにくいところだ。下げ幅が深くなるかどうかのカギを握るのは、前述したニューヨークダウの動き。米国の量的緩和策縮小が10月に終了する公算大で、この前にニューヨークダウが急落すれば金は底入れし、買いチャンスが到来、円安基調の東京金も買われやすくなる。

ここ数週間のNY金に注目 米株価急落が買いを呼び込む

GOLD 金

岡地（株）
東京支店
投資相談部
小林 晃一氏

金は買い方針で臨むのが得策だ。ポイントは日柄といって良かろう。具体的に、ニューヨーク金の変動サイクルは昨年末まで9週間サイクルだった。以降は11週上げ・11週下げのサイクルとなっており、ニューヨーク金期近が6月3日に1、240・5ドル急落を演じ、8月5日には1万6、369・55ドルまで下げた。

ウクライナの情勢不安や米国の利上げ機運が株価を急落させた要因といえようが、米国の経済指標の好転にもかかわらずダウが下落して、投資家の動揺が感じられ、株価下落に対処するのが得策だ。

ルの安値をつけて、今週10日に10週、19日に11週目を迎える。つまり、今週から来週にかけてのニューヨーク金の動きから目を離せない。

また、注目しているのはニューヨークダウの動向だ。ニューヨークダウは7月17日に1万7、151・56ドルの史上最高値を示現したあと下落、同31日に一気に300ドル以上の

より、安全資産の金買いを誘うことが予想される。ウクライナ問題などの地政学的リスクが常にマグマのように蠢き、いつ爆発するかも判らない状況であることも金にプラスに作用する。ニューヨーク金期近はフシ目の1、330ドルを目指す動きを予想。東京金期先は4、100円が下値抵抗線と目され、押目買いで対処したい。

紛争と利上げ機運が綱引き 先行きのインフレを意識する

GOLD 金

岡地（株）
東京支店
投資相談部
浅見 達也氏

ウクライナ、パレスチナなどの地政学的リスクは金にとって強材料となる一方で、米国の金利引き上げ機運は弱材料となる。金価格はこの両者の綱引き状態のなかで揉合っているが、目先は利上げ機運が優勢で、短期的には戻り売りで対処するのが得策だ。

1、300ドル台を固め切れないのは、投資家が量的緩和策終了後に到来するだろう利上げを先取りする動きを見せているためだ。

今後、米金融当局が利上げを匂わせるような発言をすれば、ニューヨーク金期近は1、240～1、250ドル

7月末のFOMC（米連邦公開市場委員会）で量的緩和策の縮小継続が示された。イエレンFRB（米連邦準備制度理事会）議長は、『ゼロ金利を当面、継続する』とする一方で、9月も量的緩和を更に縮小、10月は追加の証券買い入れをゼロにする意向を示している。地政学リスクが市場で取り沙汰されながらも、ニューヨーク金が

を目指そうが、ここで下げ止まると判断して良さそうである。

よくよく考えれば、利上げは、経済が活性化し、デフレ傾向から脱却して、インフレを誘う現象で、将来的には金価格に強材料となる点に注意が必要だ。

東京金期先は円安が下支え要因。ここは逆張りで丹念に利を抜きながら積み重ねることが肝要といえる。